第４課　神と人間の苦しみ

【暗唱聖句】

「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」マタイ6:34

【今週のテーマ】

ヨブ記はモーセがミディアンの地で書いたと言われていますが、イスラエルの人々やその国からまったく切り離されて書かれています。これは人間の苦しみが普遍的であり、いずれかの民族や時代に限定されるものではないからです。ヨブの苦しみは現代のわたしたちの苦しみをも象徴しています。

【日曜日　自然界の中の神】

「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」ローマ1:18～20

自然を通して神の永遠の力と神性さは現されており、誰でも、神について知ることができるようになっています。だから、不信心な者に対しても、神は公平な裁きを下されるのだとパウロは言います。ヨブ記の中にも、次のような言葉が書かれてあり、パウロの言葉を反映しています。

「獣に尋ねるがよい、教えてくれるだろう。空の鳥もあなたに告げるだろう。大地に問いかけてみよ、教えてくれるだろう。海の魚もあなたに語るだろう。彼らはみな知っている。主の御手がすべてを造られたことを。すべての命あるものは、肉なる人の霊も、御手の内にあることを」ヨブ記12:7～10

空の鳥も大地も海の魚も、みな主が創造されたことを教えてくれる。そしてすべて命あるものの霊は神の御手の中にあることを教えてくれる。人間も同様にあることを・・・。

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」詩篇19:1

有名な詩篇の1節。この節は、神がどのようにご自身の存在を啓示されているか表現しています。同義型パラレリズムが使われており、天体すべてが神の大きさを物語っていると教えます。「天」は、夜の天体を指し、「大空」は昼の空を指します。詩人は、パラレリズムを上手に使うことによって、一日中どの時間であったとしても、神の栄光とその能力の素晴らしさから逃れることができないと讃えます。夜空には、数え切れないほどの星々と月光が輝き、昼空には、太陽の光と熱が照り注ぎます。詩人の思いは、もし、これらの「御手のわざ」によって創られた生命のないものが人の心をへりくだらせるほどの輝きと雄大さを持っているならば、それらを創られた創造主の栄光と偉大さは、それをさらに上回るものであろう、というものです。

ヨブは最終的に、神がいかなるお方であり、自分は神とどういう関係なのかを見つ直すことによって、苦難を乗り越える力となっていきますが、まさにこの詩篇の記者の心境に至ったのです。

【月曜日　それ自体から生じたものは何もない】

宇宙論的証明…自然界（宇宙）を証明的推論の出発点とし，自然界にみられる因果関係をたどって原因にさかのぼり，ついに最後の第一原因に達し，これを神と認める方法のことを言います。すべてのものは、それ自体から生じたものは何もなく、必ず原因、創造された方があるということ。

「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。」黙示録4:11

「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。」コロサイ1:16、17

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」ヨハネ1:1～3

これらの聖句は地球も、宇宙も、すべてのものは主なる神、御子イエス・キリストによって創造され、支えられていることを教えています。また、万物は御子のために創造されたとも書かれてあります。つまり、わたしたちは御子イエス・キリストのために、御子イエス・キリストのよって創造され、支えられているということです。しかし、この関係を忘れて、人間は無から生じたというとき、わたしたちは自分がなぜ存在しているのか、その明確な理由を失います。偶然の産物にすぎなくなるからです。存在理由を失うとき、生きる意味を見失い、悩みが生じます。生きるも死ぬも、ただ主のため、というキリスト者の単純な生き方の中に、幸福は隠されています。

また、創造主なる神と想像された人間との正しい関係に立ち返ること、これはヨブ記の大きなテーマとなっています。サタンからくる苦難でさえ、この神様とのあるべき関係に気づかせてくれるためのものとなるのです。

【火曜日　最古の書巻】

多くの人を悩ませる疑問の一つは、神が存在し、その神が憐み深い愛の方であるなら、どうしてこの世には多くの苦しみや災いがあるのかということです。モーセがこのヨブ記を記したのは、エジプトを追われ、ミディアンの地で羊飼いとして暮らしていたときだと言われています。孤独を味わい、人生の意味を見失いそうになっていたであろうモーセが、このところで創世記とヨブ記を記したというのは興味深いことです。創世記もヨブ記も、なぜ人間は存在しているのかというテーマに対して、神という存在を前に見つめています。そこに唯一答えがあるからです。また、人間の痛みや苦しみという普遍的な問題が、聖書のすべての書の中で、最初に書かれたということも、興味深いことです。この問題がいかに人間にとって大きな問題となるかをご存じであった神が、希望と救いを与えられるために、最初に書かせられたのです。

大きな苦難の中で、わたしたちは信仰を見失いそうになるかもしれません。しかし、結局、神以外に救いはないことも知っているのです。苦難の中で、はじめて神にすがるようになるのです。

「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」マタイ6:34

＊先のことは主に委ねよとイエスは教えられました。

「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」ヨハネ16:33

＊信仰を持つと苦難はなくなると考える人があるかもしれませんが、主は苦難はあると言われています。しかし、すでに主はそれに勝利していると宣言されています。だから、わたしたちは苦難をすべて主に委ねるのです。

「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう／お前の民、あの書に記された人々は」ダニエル12:1

＊大きな苦難の中で、ミカエル（イエス）によって、わたしたちは守られます。救いは大きな苦難の中で起こります。

【水曜日　難問】

「全能者の矢に射抜かれ、わたしの霊はその毒を吸う。神はわたしに対して脅迫の陣を敷かれた。青草があるのに野ろばが鳴くだろうか。飼葉があるのに牛がうなるだろうか…」ヨブ記6:4、5

「…神より正しいと主張できる人間があろうか。神と論争することを望んだとしても千に一つの答えも得られないだろう」ヨブ記9:2，3

10:8 御手をもってわたしを形づくってくださったのに／あなたはわたしを取り巻くすべてのものをも／わたしをも、呑み込んでしまわれる。10:9 心に留めてください／土くれとしてわたしを造り／塵に戻されるのだということを」ヨブ記10:8～10

無視論者は、試練の意味を神に問うことはしません。わたしたちは神を信じているからこそ、試練の理由を神に教えてほしいのです。理由が少しでもわかり、納得したいのです。神に愛されているのなら、この試練も愛の現れなのだと信じたいのです。しかし、それでも神はなお沈黙されることがある。そのとき、わたしたちもやがて言葉を失うことでしょう。そして長い沈黙の後、「それでも主よ、わたしはあなたの愛を信じます」と告白するとき、心の中に神の国の広がっていくのを経験することでしょう。

【木曜日　神義論】

神義論…悪いことが起こるのに、神はそれでも善であると理解しようとすること。これはヨブ記のテーマであり、いまもなお、この議論は続いています。

「それはいったいどういうことか。彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。3:4 決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「あなたは、言葉を述べるとき、正しいとされ、／裁きを受けるとき、勝利を得られる」と書いてあるとおりです」ローマ3:3，4

パウロは、神の民と呼ばれる者たちの中に不誠実な者たちがいたにせよ、それによって神の誠実が無にされるわけではないと語ります。そして、詩篇51:6を引用して、神の正しさを主張していますが、詩篇51:6のみ言葉は、次のように書かれています。

「あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません。」詩篇51:6

「あなたの裁きに誤りはありません」という詩編の言葉が、ローマ3:4では「（あなたが）裁きを受けるとき、勝利を得られる」となっています。つまり、詩編では、神様が裁く側にあるのに対して、ローマ3:4では、神が裁きを受ける側になっています。裁きの正しさ、勝利は、神様にあるという点は同じですが、いったい誰が、神を裁くのでしょうか。わたしたち人間です。

信仰を与えられているといいながら、その信仰生活で、どんなことを、神に考えているのか。教会にも行き、献金もし、祈ってもいるのに、どうして、こんな目に遭うのか。神は、ほんとうに私を愛してくださっているのだろうか。神は、なぜ、わたしにこんなことをさせるのか。なぜ、わたしの問題をすぐに解決してくださらないのか。そんなことを考えながら、自分の価値判断で、神は正しいとか、間違っているとか、神は優しいとか、厳しいとか、そんなことを考えているのではないでしょうか。　けれども、私たちが何を言おうと、神様は、そんなことで左右されるような方ではない。人間が神を呪い、罵ったとしても、神の真実は変らないのです。